

世界の高い日本評価を知ることには深い意義がある

——海外の人々は日本をどう捉えているのか——

◆先ず日本語は世界9位の大言語だと知ろう

日本は、孔子学院を世界に広げてきた中国や、これに習い世宗学堂を立ち上げた韓国のように国家戦略として自国語の世界普及を目指してきた訳ではない。徐々に徐々に日本語の普及を図ってきた。海外での日本語学習者の増加は、バブル経済の崩壊で、日本が長い低迷期に入った自民党政権下と3年間の民主党政権下の時でも止むことは無かった。学者やジャーナリスト、政治家が民主党政権下やその前の自民党政権下でも盛んに日本衰退論や停滞論を論じ、新聞・テレビ情報が悲観論を流し続けても、日本語学習者は着実に増えてきた。

前回の留学生通信42で「日本語は世界の10大言語の1つ」と紹介したが、荒川洋平・東京外国語大学准教授が著した『日本語という外国語』（講談社現代新書）にも紹介されているが、言語は世界に5000語から7000語あると言われ、8000語という学者もいるが、トップ10に入るのは主として、国の人口の多さか、かつて植民地を世界に持っていたか否かにかかっている。

荒川氏が論拠にしている「Ethnologue : Languages of the World, 16th edition, SIL Publications」（2009年刊行の『エスノログ第16版』）によると、09年調査の1位は人口13億人（現在）の中国語、2位はかつて世界にスペイン帝国を築いたスペイン語だ。英語は3位。4位は中東諸国のエジプトや砂漠の石油国サウジアラビアなどが使っているアラビア語。5位は人口12億人のインドの第1公用語のヒンディー語。6位はバングラディッシュとインドなど同国周辺で使われているベンガル語が入る。7位がかつて世界に雄飛し中南米に多いポルトガル語。8位は人口1億4000万人のロシア語で、人口1億2千万人の日本語は9位を占め、10位に人口9000万人のドイツ語が入る。日本語は他の統計・調査でも9位から11位に位置しているという。

◆海外で日本語を学ぶ人は500万人に激増

日本人が日本語を世界10大言語と思えないのは、日本語が日本以外でほとんど使われていないからだ。英語は世界60カ国以上で公用語として用いられており、世界の大半の都市で通用する強みを持っている。

しかし、日本語を勉強する外国人は着実に増えている。例えば国際交流基金の調べでは、海外で日本語を学習する人の数は、1979年（昭和54年）にはわずか12万7000人だったのが、2006年（平成18年）には298

万人へと、27年間で23倍以上増加している。荒川氏は「日本語学習者の急増ぶりは、本当に驚きです」（前掲書）という。

それから6年が経過。国際交流基金が3年に1度の割で行っている「海外日本語教育機関調査」の2012年の速報値（2013年7月8日発表）では、海外での日本語学習者は、398万人へとわずかこの6年間で100万人も増え、2009年比では9.1%増となった。単純に割ると、1年ごとに日本語を学ぶ17万人都市が誕生している勘定だ。日本語教育機関は2009年比で7.5%増1万6045機関、教師数は28%増6万3771人へと拡大した。

このままの勢いで行くと、東京オリンピック・パラリンピックが開かれる2020年（平成32年）には、ほぼ確実に500万の大台に乗るだろう。これには、海外放送などで日本語を勉強している個人の数は含まれていないので、実際に日本語を勉強している個人はもっと大きい数字となるだろう。

日本はノーベル賞受賞者を毎年のように輩出している。小惑星探査機「はやぶさ」やスーパーコンピュータ「京」の開発、リニア新幹線、第3世代原子炉開発などに代表される日本の技術水準の高さは世界的に定評がある。トヨタや日立、東芝、三菱重工、パナソニック、ソニーなどの活躍に見る日本製品の優秀性。漫画やアニメなど日本のソフト文化への憧れ。また、開発途上国では日本で働く1カ月の給与が、本国での1年分や半年分に相当するという経済的要因が、日本語を学ぶ動機としては高いシェアを占めている。

しかし何よりも、日本人自身が気づかぬぐらい諸外国が日本を高く評価している事実を知った方が良い。日本にきた留学生の留学前と留学後では、日本を知ることができた留学後の方が、日本の印象度は確実に高まる。増加する海外からの旅行者はリピートを希望する比率が多い、など様々な要因が複合的に重なり、海外での日本評価が高まり「日本語熱」となって跳ね返っている。

◆「尊敬に値する国、それが日本だ」と語るラガルドIMF専務理事

言葉の世界に関しては「日本語は難しいから、世界語にはなれない」と日本人自身が決めつける必要はない。日本を代表する明治の思想家の内村鑑三は「豊臣秀吉は日本語を世界語にする」と秀吉が語った大望についても言及している。逆に日本人自身が日本と日本語の素晴らしさを自覚することも大事だ。

そして、長いデフレ経済から来る日本の将来を不安視する「悲観論」や「日本経済行き詰まり論」に囚われずに、もっと世界の日本への高い評価を知ろうではないか。何故なら、日本評価について豊富な知識を持つことは「自国への自信と誇りにつながり、力の源泉となる」からだ。

外国人の書いた旅行記や印象記、見聞録などを読むことも良い経験だ。まず、現在の世界のリーダー層が今の日本をどう見ているのか紹介したい。

安倍政権が発足して間もなく『文藝春秋』が「安倍内閣は日本を救えるか」と特集を4月号で組んだ。その中にIMF（国際通貨基金）初の女性専務理事

の独占インタビューが載った。「日本は第二のギリシャにはならない」と題して、IMF専務理事のクリスティーヌ・ラガルドさん（59歳）が、ジャーナリストの近藤甘奈さんのインタビューに答えた印象深い内容だ。

ラガルドさんは10代の頃、シンクロナイズドスイミングのフランス代表選手だったが、エクス＝アン＝プロヴァンス政治学院を卒業後、アメリカで弁護士として活躍。帰国後、ドミニク・ド・ヴィルパン内閣の農業・漁業相に抜擢され、2007年からフランソワ・フィヨン内閣の経済・財政・産業相に就任、フランス並びにG8初の女性財務大臣となった才媛だ。2011年5月には実力を見込まれ全会一致でIMFトップの専務理事に就任し、再生を託された。

ラガルドさんは、日本が、2011年の東日本大震災と福島第一原発事故の対処に迫られていた最中、突如襲った国際投機筋による一斉のドル売り、円買いで「1ドル76円25銭という戦後最高値」をつけた時、ただちにガイトナー米財務長官に電話し、各国連携しての円売りを提言。各国中央銀行総裁とも連絡をとり莫大な円売りを行って円安に誘導し日本の経済危機を救っている。

近藤さんが、ラガルドさんにインタビューして感じたことは「日本という国に対する信頼であり、共感だった」という。ラガルドさんの適格な経済とアベノミクス分析は特集を読んでもらうとして、近藤さんが、大震災直後の最悪期にいた日本について「日本は本当に変われるのでしょうか」と質問をされた時の答えが印象深い。彼女はこう答えている。

「日本は本当にたぐいまれな国です。まず他国に比べて不平等が少ない。そして他人への尊敬と思いやりの気持ち、他者と協力できる能力、規律を守れる体質、改善を怠らない精神、そうした資産は大いなる尊敬に値します。日本が今回、世界に先駆けて、デフレ脱却に成功すれば、それは世界の人々にもヒントと勇気を与えることになるでしょう」

◆BBCの世論調査で2012年1位に輝いた日本

「尊敬に値する国、それが日本だ」とラガルドさんは断定してはばからない。日・中・韓の将来を担う若者に聞かせたい意見だ。批判ばかりするよりも互いに学びあうことの方が大事であり、母国を尊敬の目で仰げることは力の源だ。

彼女の意見は国際的な世論調査が証明している。2012年5月20日に発表した英国のBBC放送の世論調査は、世界22カ国・2万4000人を対象にした調査だが、「世界に良い影響を与えている国」として日本が初めて最も高く評価され「世界1位」となった。日本の影響力について、20カ国で肯定が否定を上回り肯定率は平均58%と最も高く、否定は21%だった。

2位はドイツの肯定率56%、3位はカナダの53%、4位は英国の51%、5位は中国の50%と続いた。中国は経済の躍進が評価されたもようだ。ただし、2013年5月23日発表の最新調査（25カ国約2万6000人）では、

緊縮財政で経済政策が成功している独がトップになり、カナダ、英国が2位と3位に入り、日本は4位へと後退した。

◆江戸期、明治期の日本を讚えた多くの外国人

ラガルドさんが「日本は本当に類（たぐい）まれな国です」と語ったが、江戸期、明治期などに日本を訪れた多くの旅行家、艦長、士官、外交官、宣教師らが旅行記、訪問記などの形で、当時日本から受けた印象を記録に残している。

日本近代史家の渡辺京二氏がまとめた『逝きし世の面影』（平凡社ライブラリー）には、明治22年（1889年）に日本を訪れた英国の詩人で『デイリー・テレグラフ』主筆のエドウィン・アーノルドの日本印象記が紹介されている。

「その景色は妖精のように優美で、その美術は絶妙であり、その神のように優しい性質はさらに美しく、その魅力的な態度、その礼儀正しさは、謙譲ではあるが、卑屈に墮することなく、精巧ではあるが飾る事もない。これこそ日本を、人生を生き甲斐あらしめるほとんどすべてのことにおいて、あらゆる他国より一段と高い位置に置くものである」（明治期の有名なジャパノロジストのB・H・チェンバレン著『日本事物誌・1』平凡社東洋文庫）

当時の日本の知識人は、近代化の成功に触れずに、自然や社会・文化的側面ばかりを取り挙げたアーノルドの指摘について批判的だったが、日本の古い文化を否定的に見がちだった明治という時代変換期の思想・見方が反映されたのだろう。実際、黒船で日本に開港を迫った米艦隊のペリー提督のお抱え銅版画家が書いた琉球や下田港の風景画は、本当に平和で長閑な美しい光景を見事に描いている。「山紫水明」の言葉通りの光景が多くの外国人の胸を打った。

安政3年（1856年）に日本に来た米国公使のタウンゼント・ハリスは『日本滞在記・中巻』（岩波文庫）で下田市近郊の柿崎村につきこう記した。「柿崎は小さくて貧寒な漁村であるが、住民の身なりはさっぱりしていて、態度は丁寧である。世界のあらゆる国で貧乏にいつも付き物になっている不潔さというものが、少しも見られない。彼らの家屋は必要なだけの清潔さを保っている」

チェンバレンは日本には「貧乏人は存在するが、貧困なるものは存在しない」と言ったが、『イザベラ・バードの日本紀行』（上下、講談社学術文庫）を表した英国人旅行家のイザベラ・バードも各地を観察旅行し、女性が世界で一番安心して旅をできる国で、自然が美しく「貧しいが、心豊かな日本人」との感想を終始抱き、感嘆に絶えずといった想いを随所に記録として留めている。

渡辺氏は英国公使のヒュー・フレイザーの妻、メアリの感想も紹介している。メアリは鎌倉の海浜で見た網漁の様子についてこう記述している。「子供ばかりではなく、漁に出る男のいないあわれな後家も、息子をなくした老人たちも、漁師たちのまわりに集まり、彼らがくれるものを入れる小さな鉢や籠をさし出すのです。そして食用にふさわしくとも市場に出すほど良くない魚はすべて、この人たちの手に渡るのです。……物乞いの人にたいしてもけっしてひどい言

葉が言われないことは、見ていて良いものです。そしてその物乞いたちも、砂丘の灰色の雑草のごとく貧しいとはいえ、絶望や汚穢や不幸の様相はないのです」

◆明治の発展を予測したロシア海軍艦長ゴロウニン

相互扶助の精神を大事にし、心が満ち足りている漁村の様相がよく解る。また、江戸期に国後島に観測上陸し、幕府に捕えられたロシア海軍士官でディアナ号艦長のワシリー・ミハイロヴィッチ・ゴロウニン艦長は、松前藩に幽閉されたが、日本人を良く観察し、捕虜の身ながら役人からも大事に扱われ、庶民も終始同情をもって見守り差し入れまでしてくれた、と事実を『日本俘虜実記』（上下、講談社学術文庫）に記している。

他に『ロシア士官の見た徳川日本』（講談社学術文庫）も残したが、彼は「日本人は天下で最も教育のある国民である」として日本人の能力の高さを評価。「至極容易にヨーロッパ型の軍艦を造る……それ故に、この公正で尊敬すべき国民を刺激すべきではないと私は思う」と私見を述べ、さらに、いずれ日本は「ヨーロッパの列強の海軍と肩を並べることができるに違いない」と幕末の日本人を見て、明治の発展を見事に洞察している。

ゴロウニンのことは、日本会議事業センターが発行している「日本の息吹ブックレット⑦」で日本論史研究家の波田野毅氏が書いた小冊子『続 世界の偉人たちの驚き日本発見記』を参照したが、ゴロウニンを助けるため高田屋嘉兵衛を捕虜にして日本と談判して捕虜交換を成立させたゴロウニンの部下のロシア海軍艦長、ピョートル・イヴァノヴィチ・リコルドも、捕虜の身でも堂々としている高田屋嘉兵衛の人物識見にほれ込み「勇気のある、断固とした意思と、誠意に満ちた率直さに接すると、彼が希に見る大人物と私の目に映じるのであった。そして彼の度量の大きさが現れるにつれて、彼に対する尊敬の念をますます高まっていった」（『ロシア士官の見た徳川日本』）と感想を綴っている。

こうした日本人が随所にいるという波多野さんは、同冊子で「日本の精神や美德は必ずや必要とされ、世界の人々の幸せに資するようになることでしょう。タウトの言うように、日本はもはや日本だけでの問題ではなくなっているのです。真打日本の出番はもう真近に来ているのではないのでしょうか」と記す。

サミュエル・ハンチントン教授が著書『文明の衝突』で「日本は世界の中でも独自の文明を持つ一つ」と評価した意味が、今更のように思い返される。権力よりも、むしろ文化・文明的権威によって永続してきた日本の皇室。受容性と融和性に富む神道の自然観。そして合力の稲作文化が育んだ独特の行動様式と道徳的絆を大事にした日本。その「世界に一つしかない文化・文明的価値の貴重さ」をよく自覚していくことはとても大事なことだ。そうした自覚の上で世界に貢献していくことが、これからの若者の大きな目標になって欲しい。